

平成 22 年度実施「いきいき協働事業」活動状況報告書

1 事業名	生ごみ堆肥で作った野菜を食べよう（地産地消・資源循環モデル事業）	
2 団体名	特定非営利活動法人 小平・環境の会	
3 担当課名	環境部 ごみ減量対策課	
4 事業実施期間	平成 22 年 4 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日まで	
5 実施場所	小平市指定場所	
6 事業の目的、目標	この事業は、有機資源(生ごみ)を地域で活用し循環させるモデル事業を実施することで、ごみ削減、地産地消、農家と消費者との交流を推進し農のあるまちづくりに貢献するモデル事業の構築を目指す。	
7 事業効果が及ぶ対象者	事業に参加したモデル世帯	
8 役割分担	団体の役割	行政の役割
合意した役割分担	事業内容の実施	広報等の協力・支援 経費の負担
役割の実施状況	事業内容を実施	市報掲載他広報を協力・支援 経費を負担
9 事業内容	<p>(1) モデル世帯との連携等</p> <p>①生ごみ処理物を提供し、エコ野菜を買い取るモデル世帯となる市民の開拓を行う。</p> <p>②モデル世帯に対し、協力農家による生ごみ堆肥の製造及び生ごみ堆肥を利用してのエコ野菜の生産作業の一部について協力するよう働きかける。</p> <p>③モデル世帯に対して、エコ野菜を買い取るよう協力要請を行う。</p> <p>④モデル世帯に対して、エコ野菜の一部をクーポンの形で買い取り、そのクーポンをモデル世帯の知人に提供し、モデル世帯以外の市民に対してモデル野菜の普及を行うよう協力要請を行う。</p> <p>(2) 生ごみ処理物の移送</p> <p>モデル世帯から提供された生ごみ処理物を堆肥場へ収集運搬し、収集運搬した生ごみ処理物の量は、受託者の計量器をもって計量する。モデル世帯が堆肥場に直接持ち込む分についても同様とする。</p> <p>また、計量した生ごみ処理物の量を収集した月ごとに市に報告する。</p> <p>(3) 協力農家との連携等</p> <p> 協力農家の開拓・交渉を行い、協力農家とモデル世帯の仲介をする。</p> <p>(4) 啓発活動</p> <p>① 年数回、エコ野菜の即売会の開催、もしくは、既存のイベントへのエコ野菜の出品を行うことにより、一般市民へのエコ野菜の存在を広報する。</p> <p>② モデル世帯等に対して生ごみの有機資源としての活用についての市民の理解を深めるために、生ごみ堆肥についての学習会を開催する。</p> <p>(5) 事業の評価</p> <p>モデル事業の結果を、小平・環境の会の視点から行う。</p>	

10 事業成果について	
<p>(1) 目標の達成状況について</p>	<p>有機資源(生ごみ)を地域で活用し循環させるモデル事業の内容を実施完了した。具体的には、ごみの削減(延べ125世帯の生ごみ260.5kgを削減)、地産地消(モデル世帯が提供した生ごみで作った堆肥を使い協力農家が栽培したキャベツとブロッコリーを購入し消費)、農家と消費者との交流(堆肥撒き協力、収穫体験、生ごみ堆肥で栽培した野菜クーポン購入)を行った。</p> <p>上記を行うことで、モデル世帯の生ごみの地域循環に関する意識向上を促すことができた。</p> <p>以上により、今後小平における「農のあるまちづくり」に向けての可能性を探ることができた。</p>
<p>(2) 解決される地域の課題について</p> <p>※計画時に設定した課題が、どの程度解決できたかを記載してください。</p>	<p><課題1> 排出可燃ごみ量の約半分を占めるといわれる生ごみを有機資源と位置付け堆肥化し活用することで、ごみを削減し、同時に生ごみの資源としての有効性を実証する。</p> <p><課題2> 市内から出た生ごみで堆肥を作り、野菜栽培し、そこに市民が関わることで農家と消費者の顔の見える関係を構築し、農家・市民双方の意識改革を図り、農のあるまちづくりを前進させる。</p> <p><課題3> 有機資源としての生ごみの地域内循環から、地産地消の推進、食農教育の実践、地域活性化につなげる。</p> <p><課題についての検証></p> <p>家庭から排出された生ごみで堆肥を作り、その成分分析を行った結果、良質の堆肥であること、また、その堆肥を使用した生育実験結果から、野菜の根張りが良いことが実証できた。農家にも堆肥について高い評価を得た。参加家庭からは、「生ごみが減って良かった」「生ごみ堆肥でできた野菜が美味しくて驚いた」という声があり、収穫体験、野菜クーポン頒布を通じて、生ごみが有効な地域資源であるという意識が浸透した。</p> <p>今回のモデル事業で、生ごみの地域内循環により、地産地消が可能であること、またそれが食農教育に結びつく可能性が模索できた。</p> <p>農家と消費者の顔の見える関係の構築について、一歩踏み出したことは画期的といえる。</p>
<p>(3) 協働事業の受益者について</p> <p>※計画時に設定した対象者が、満足が得られたか。どう変化したかを記載してください。</p>	<p>モデル世帯の満足度は高い(期待通りとほぼ期待通りという結果)。今後も継続して欲しい。参加したいという声がよせられている。</p> <p>事業の継続について期待する声もある。以下アンケートより抜粋</p> <p>「(生ごみ堆肥で作った)キャベツがとてもおいしいので驚いている」</p> <p>「生ごみ堆肥でできた野菜は美味であることがわかった」</p> <p>「生ごみを堆肥化していくことは、生ごみ減量にとっても役立つと思うので、これからもこの事業を継続してほしい」「小平市のリサイクル事業の中に、生ごみ堆肥化づくりを加えられないか」</p> <p>アンケートにより、生ごみ堆肥を使った野菜に対する意識への変化が伺える。</p>

<p>(4) 協働による相乗効果について ※協働したことにより、単独で事業を行うよりも、成果があったか記載してください。</p>	<p>市報に事業についての記事を掲載することで、参加者の確保ができ、事業の足がかりができた。 市と市民団体との協働事業ということで、協力農家との信頼関係がしっかりしたものになり、円滑に事業ができた。 学習会に、担当課職員の参加があり、この事業に取り組む行政と市民の結びつきを確認できた。</p>
<p>11 今後の事業展開について</p>	<p>協力農家からは、生ごみ堆肥について評価を得ている。参加世帯からは、今後も協力したい、生ごみ堆肥化事業を継続して欲しいという声がある。 今後、この事業を継続していくには、他の農家に生ごみ堆肥の有効性の理解をひろげていくこと、生ごみ堆肥を使う農家の開拓、広報による市民の意識改革、市民が生ごみ堆肥を使う場の確保、生ごみ堆肥を使う市民グループを育成していくことなどが必要であると考えます。</p>